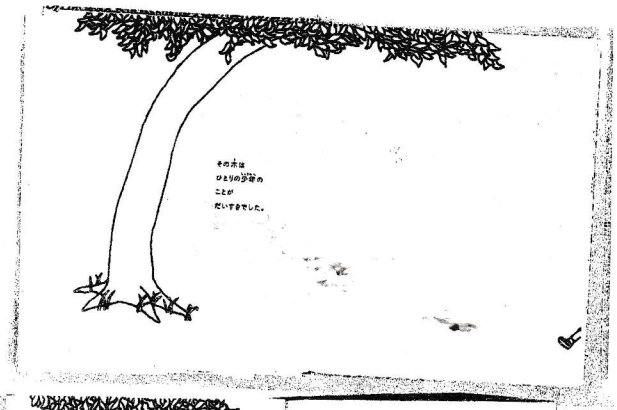
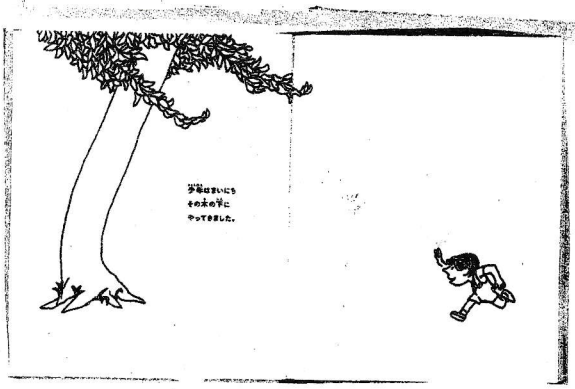
おおきな木

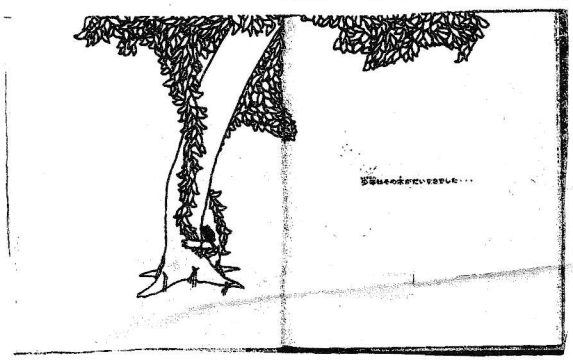
シェル・シルヴァスタイン
村上春樹 訳



その木は
ひとりの少年の
ことが
だいすきでした。

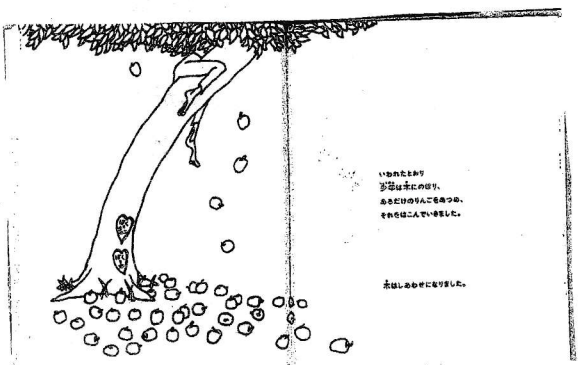


少年はまいにち
その木の下に
やってきました。



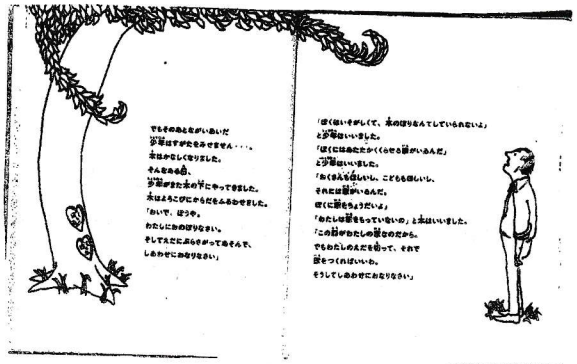
少年はその木がだいすきでした・・・

そしてある日、少年が木の下にやってきました。
木はいいました。
「いらっしゃい、ぼうや。わたしに
おのぼりなさい。えだにぶらさがって、
りんごをおたべなさい。わたしのこかげでおやすみ、
しあわせにかならない」
「もう木のぼりをしておよぎとしじゃない」
と少年はいいました。
「木のぼってたのしめたいんだ。
おかねがいるんだよ。
おかねがなくっちゃ。
ぼくにおかねをちょうだい」
「ごめんせい、おかねはないの」と木はいいました。
「わたしにあるのは、はっぱとりんごだけ。
りんごをもっていきなさい、ぼうや。それと
まちでおとりなさい。そのおかねで
しあわせにかならない」



いわれたとおり
少年は木のぼり、
あるだけのりんごをつみ、
それをはこんでいきました。

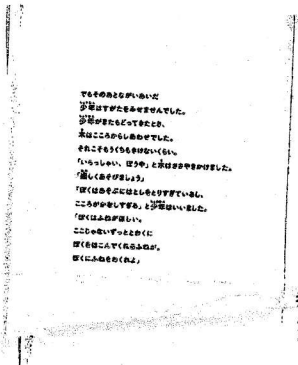
木はしあわせになりました。



でもその あとも がいさいだ
少年はすがたをみせませんでした。
木はかなしくなりました。
そんなある日、
少年がまた木の下にやってきました。
木はようこそのにからだをふるわせました。
「おいで、ぼうや。
わたしにおのぼりなさい。
そしてえだにぶらさがってあそべ、そして
しあわせにかならない」

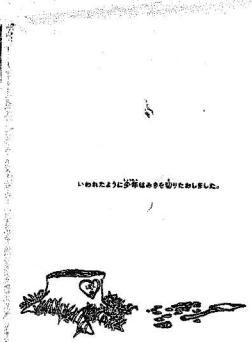
「ぼくにはおもちゃがいるんだ」
と少年はいいました。
「ぼくにはおもちゃをかう おかねがいるんだ」
と少年はいいました。
「おくさんもほしいし、こどもも ほしいし、
それには家がいるんだ。
ぼくに家をちょうだい」
「わたしは家をもっていないの」と木はいいました。
「この森がわたしの家のだから。
でもわたしのえだを切って、それで
家をつくればいい。
そうしてしあわせにかならない」

少年はいわれたとおり
木のえだを切り、
それをはこんでいって
家をつくりました。

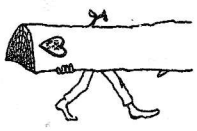


でもその あとも がいさいだ
少年はすがたをみせませんでした。
少年がまたもどってきたとき、
木はここからうしろめたそうでした。
それこそもうくうもきゅうくらい。
「いらっしゃい、ぼうや」と木はおそるおそるよびかけました。
「楽しみざがしよう」
「ぼくはおなかにはとしをとりすぎているし、
ここらがかなしすぎる」と少年はいました。
「ぼくはよるがほしい。
ここじゃないずっとどこかに
ぼくをはこんでくれるふねが。
ぼくにふねをおくれよ」

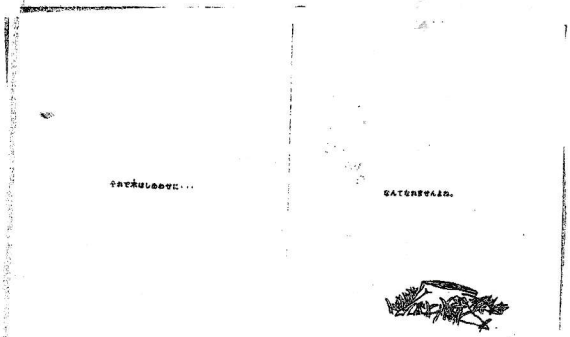
「わたしのみきを切って
ふねをつくりなさい。
と木はいいました。
「それにのってどこかにいって・・・
しあわせにかならりなさい」



いわれたように少年はみきを切りたおしました。



それでふねをつくり、とおくにでだうました。



そして木はしあわせに・・・

なんてなれませんよね。

「ぼくはもう、とくになにものつようとはしない」
と少年はいました。
「こしをおろしてやすむ、しずかなばしょがあれば
それでいいんだ。すいぶんつかれてしまった」
「それなら」と木はいいました。そして
できるだけしゃんん、まっすぐからだをのばしました。
「ふといきりかぶなら、こしをおろして
やすむにはぴったりよ。
いらっしゃい、ぼうや、わたしにおやすみなさい。
すわって、やっくりおやすみなさい」

少年はそこにこしをおろしました。

訳者あとがき

この「おおきな木」はアメリカでは絵本に分類され、それなりのすべてにそれなりの好むと好まざるとにかかわらず、ひとりの人々の心にしっかりとアピールする力を持っている本なのだろうと思います。

この物語は2つの大きなキャラクターとシンプルなストーリーで成り立っています。片方の大きなキャラクターは木です。それは心にとめやすいものであるし、また実際にそれは多くの人々にとめられてきました。そしてもう一人の少年、あるいは人間の象徴としてのイメージ、ストーリーとしてそれにしめやすいものです。片方の大きなキャラクターは木であり、また人間でもあります。ちょっとアンビバレントなところもありますが、そこもまたこの物語のユニークなところです。

今の日本人の中には、「とくにこれといった欲もないし、なにかをしてあげたいと思う相手もいないし、なにかをしてもらいたいとも思わない」という人々も、決して少なくないと思います。しかしそれでもやはり人は生きていかなくてはならないし、生きていくためにはなにかしらの目的が必要になってきます。

この物語の少年は、木からりんごをもらい、木からえだをもらい、木からみきをもらいます。そしてそれらを使って、自分の人生を自分の力で切り開いていきます。木はそのような少年の姿を見て、喜びを感じます。

この物語を読んだ人の中には、木はあまりにも自己犠牲的であり、献身的であり、無私であり、それは理想的な人間の姿ではないか、と感じる人もいるかもしれません。しかし僕はそうは思いません。木は少年に対して決して自己犠牲を強いてはいないからです。木は少年に対して、ただ「ここにいてほしい」と願っただけです。木は少年に対して、「ここにいてほしい」とか「ここにいるべきだ」とか「ここにいなければならない」とかいうような強制的なことは一切言っていません。木はただ「ここにいてほしい」と願っただけです。

木は少年に対して、「ここにいてほしい」と願うことによって、自分の人生を自分の力で切り開いていくことを少年に対して期待しているのです。木は少年に対して、「ここにいてほしい」と願うことによって、自分の人生を自分の力で切り開いていくことを少年に対して期待しているのです。

そういう点では、この物語はアメリカの子供の絵本にしてはいささかなりとも変わっているかもしれません。普通の絵本であれば、ここで少年は木の期待を裏切って、木のもとを去り、自分の人生を自分の力で切り開いていくのだ、と言ってもいいでしょう。しかし少年は木の期待を裏切ることはありません。少年は木の期待を裏切ることはありません。少年は木の期待を裏切ることはありません。